



TOKYO
SOCIETY OF
ARCHITECTS &
BUILDING
ENGINEERS

2011

平成23年

主催
社団法人 東京建築士会

東京都中央区晴海1-8-12
オフィスタワーZ 4F
TEL.03-3536-7711 FAX.03-3536-7712

住宅建築賞 入賞作品

2011 住宅建築賞 入賞作品展

住宅建築賞

柳澤 潤

長岡 勉+田中正洋／横尾 真

間田 央+間田真矢

高橋真紀+潮上大輔

峯田 建+恩田恵以

7/4 月～22 金
DIC COLOR SQUARE

協力: DIC株式会社 DICカラーデザイン株式会社

10:00～17:00 最終日16:00まで 入場無料



DIC COLOR SQUARE
〒103-8233
東京都中央区日本橋3-7-20
ディー アイ シー ビル1F
TEL 03-5203-7780
www.color-square.com

[関連イベント]

「住宅建築賞」入賞レセプション

7/19 国 16:30～18:30

実施場所: ディー アイ シー ビル17F DIC大会議室
定 員: 150名 申込先着順・無料

〔住宅建築賞〕委員長: 塙本由晴
審査委員 委員: 安藤邦廣 トム・ヘネガン 中谷礼仁 平田晃久

[協賛]
(株)建築資料研究社／日建学院
(株)総合資格

[後援予定]
(社)日本建築士会連合会／(社)東京都建築士事務所協会
(社)日本建築学会 関東支部／(社)日本建築家協会 関東甲信越支部
(株)新建築社／日経アーキテクチュア

[主催]申込・お問い合わせ先
社団法人 東京建築士会

〒104-6204 中央区晴海1-8-12 オフィスタワーZ棟4F(晴海トリトンスクエア内)
TEL.03-3536-7711 FAX.03-3536-7712 E-mail info@tokyokenchikushikai.or.jp
www.tokyokenchikushikai.or.jp

住宅建築賞 入賞作品 平成23年 社団法人 東京建築士会

応募趣旨

20世紀は、建築の表現と住宅が非常に強い結びつきを示した世紀と記憶されることでしょう。特に第二次大戦直後の日本では、資本主義を前提にした新しい民主主義的な社会制度の中で、個人住宅の生産が都市の再建と経済成長を担ってきました。それは農地山林を住宅地に変え、道路等の社会基盤の需要を生むと同時に、家族を共同体から分離し、住宅の中では家族の構成員を一人一人の個室に分けることで、消費の機会を増やしてきました。住宅地をつくるほど自動車が売れ、個人用に分かれた空間をつくればつくるほど、その空間を満たすために様々な家具、電気製品が売れる。すなわち物の買い手が増えることになります。こうして20世紀の個人住宅は、都市を平面的に拡大し、消費者を増やすエージェントとして働いてきたのです。個人の生活の場をつくるという住宅の個別の目的の集積の上に、こうした巨視的なプログラムが走っていたと言えるでしょう。その影響でしょうか、住宅はいつの間にか内向きにものを溜め込むばかりで、外を楽しんだり、他人が居候したりする寛容さを失ってしまったように思えます。しかし21世紀を迎えた今、もうこれ以上都市の水平的な拡大は期待できませんし、消費者としての個人の粒子化の役割はスマートフォンによって置き換えられてしまった感があります。つまり、20世紀的なプログラムから、もう住宅は解放されて良いのではないか?

そのとき、住宅はどこへ向かえばいいのでしょうか?

そんな疑問に応えてくれるような、素晴らしい作品に巡り会えることを楽しみにしています。

委員長 塚本由晴

応募要項

- 1)上記の趣旨にかなうもの
- 2)一戸建住宅、集合住宅及び併用住宅等とする
(大幅な増改築、公共の建築も含む)
- 3)原則として作品は最近3年以内に竣工したもの
- 4)雑誌等に発表したものでもよい
- 5)建築物の所在地は東京圏とする
- 6)応募の点数は自由とする
- 7)審査員の閲覧した作品は応募できない

応募要件

- 1)応募資格 応募作品を設計した建築士(法人組織の場合は設計担当した建築士)
登録料 本会正会員 無料(申込時に入会した方を含む)

会員外 1点につき5,000円

(作品を郵送する場合 登録料は現金書留にてお送りください)

- 2)提出期限 平成23年1月26日(火)

(郵送の場合は、1月26日㈫の消印があり審査に間に合うよう到了したものは有効)

- 3)提出先 社団法人東京建築士会 住宅建築賞係

〒104-6204 中央区晴海1-8-12オフィスタワーZ棟4階
TEL 03-3536-7711

- 4)提出資料 申込書及び本会指定A2版台紙

図面及び完成写真数点(内・外観)、平面図、立面図、断面図、配置図、設計主旨(300字以内)等をA2版台紙一面(本会指定の用紙・原則として縦づかい、パネル化しない)におさめること。なお、写真の大きさ図面等の縮尺及びレイアウトは自由とする。プレゼンテーションの表現自体は、審査の対象としない。

[申込書及び本会指定A2版台紙は本会事務局において頒布します。郵送希望の場合は、宅配便着払いにてお送りできます。その場合、氏名、送付先、連絡先、会員番号等を明記のうえ、FAX(03-3536-7712)にてご請求ください。なお、事務処理の迅速化を図るため、宅配便着払い了承の旨書き添えください。]

審査委員

- 委員長 塚本由晴
委員 安藤邦廣 トム・ヘネガン 中谷礼仁 平田晃久

審査

第一次審査(書類審査)に通過したものは原則として現地審査する。

平成23年 住宅建築賞 審査結果

応募点数 131点 入賞 5点 金賞 該当なし

<住宅建築賞>(受付順)

●ルネヴィレッジ成城 (東京都)	設計者 柳澤潤 (株)コンテンポラリーズ 建築主 施工者 総合地所㈱ (株)小川建設 (建物構造:鉄筋コンクリート造)
●ジュッカイエ (東京都)	設計者 長岡勉+田中正洋/横尾真 POINT/OUVI 建築主 施工者 島田光男 (有)セットアップ (建物構造:木造)
●ミンナノイエ (東京都)	設計者 間田央+間田真矢 mamm-design 建築主 施工者 間田央 (株)小川建設(㈱) (建物構造:鉄骨造)
●シナの木と白い家 (埼玉県)	設計者 高橋真紀+潮上大輔 高橋真紀建築設計事務所 建築主 施工者 高橋光男 (株)戸工務店 (建物構造:木造)
●SPROUT (埼玉県)	設計者 峯田建+恩田恵以 スタジオアーキファーム 建築主 施工者 山崎雅之 (有)藤建設工房 (建物構造:木造、一部鉄骨造)



■一次審査風景

平成23年住宅建築賞 作品集講評

総評

昨年、一昨年に引き続き住宅建築賞の審査委員長を3年続けて務めさせていただくことになった。過去二年の「第四世代の住宅」というタイトルを趣旨文からはずしたものの、問いたいことは変わらない。20世紀に住宅に与えられていた社会的なプログラムから解放されたとしたら、住宅はどこへ向かうのか? 住宅の新たな解放感を求めて、書類審査で選ばれた5作品の現地審査に臨んだ。

あいにくの冷たい雨に降られながら、最初の作品『ミンナノイエ』へ。これは中心に樹木を抱き込んで生活する家。露地の奥から家の中に入ると、そこにはトネリコが植わっていて驚く程明るい。この場所は実はガラスの屋根がかかって室内化されているので、普通なら雨が洗い流す葉に積もるほこりを、人がふいてあげねばならない。自分達以外の生命の世話をすることと、住まうことを重ねたい気持ちはわかる。しかし部屋の面積をいじめ、外気から隔離して木を植えてまでやることに説得力はあるだろうか。商業ビルのアトリウムを世田谷の密集住宅地に縮小再生産する図式に陥っていないだろうか。

次に向かったのは『ルネヴィレッジ成城』。これが雨で一番損をした。ヴォリュームを分割することで獲得した中庭、各戸専用の屋上庭園と、室内を行ったり来たりするのがこの作品の肝なのに、それがおっくうになるからだ。それでも必死に晴れた日を想像するうちに、中庭も屋上庭園もまるで独立住宅のそれとかわらない形式にとどまっていることに気がついた。複数の世帯で使いこなすには、居住者間での調整がかなり必要になるだろう。それを居住者に委ねるというのは期待し過ぎというものの、建築の形式の方からその人達が抱えるはずの問題に歩み寄っていく余地がまだまだあると思われた。続いて調布の『ジュッカイエ』に向かう。玄関脇にまたトネリコを見発見! そういうればルネヴィレッジの中庭にも植えられている。トネリコはすっかり世田谷あたりのデザイン住宅の記号になっている。地にどっしりと根を下ろす楠の木を植えて、定住の決意を示すのは時代遅れということか。

話を『ジュッカイエ』に戻そう。階段室をできるだけコンパクトにまとめるのが小住宅設計の定石。でも小ささが臨界値を越えた現在の東京に、逆の手法があらわれた。すなわち階段が普通の家よりも大きくなつて家の全体となる。この「居住可能階段」と呼ぶべき形式は、東孝光の『塔の家』の系譜。家の異なる領域が、縦に斜めに繋がっていく。この形式では床が切片化し、家具に近い存在になる。そのことに意識的に取組んで、人の姿勢、向きと、開口や家の中の物品との関係を調整することで居心地の良い場をつくり出している。その意味で金賞候補の一つと目されたが、いわゆる「狭小住宅」という枠組みの最適解であるが故に、枠組みを補強してしまうディレンマを抱えている。それを乗り越えて、狭小住宅の枠組みを相対化する建

築的知性こそが、住宅を新たな解放感に導くのではないか? 昼食を挟んで所沢へ向かう。茶畑が混じる農村風景には、生産の場であるが故の空間的な文法が共有されている。その中に『SPROUT』は建っている。実は今回訪れる作品の中では最も問題作だと思う。なぜならこの作品の枠組みには、農家の跡取り不足と農村風景の崩壊という、農業生産や美しい風景の持続性を脅かす二つの危機が重ねられているから。この枠組みに建築家がどう応えるか、いやがおうにも期待は高まる。建築家の解答は、必要な駐車台数と車まわしの確保と、農家の若夫婦の生活空間の確保を、計画的矛盾と捉え、これを極めてユニークな構成によって解決する道を選んだように見える。敷地内の交通計画の文脈に住宅を従属させつつ、住空間を確保するという離れ業である。しかし先に述べた農村の空間文法がその解決に統合されているとは言えない。その説得性は限定付きである。使用財としての価値は満たしても、そのあり方にもっと奥行きや広がりが欲しい。風景崩壊の危機にある近郊農村での計画なら、どんなささいな計画であってもまずはその場の空間文法に助言を求めるこによって、その存在に光を当てるのも建築の見識ではないか。

薄暮の中最後の作品『シナの木と白い家』に到着。今回訪れた中では最も明快かつ洗練された美しさをもつ作品。特に縦に引き延ばされた神殿のようなファサード、それと同じ大きさをもった建物の地下から屋根まで達する東西両側の吹き抜け、そしてその壁にシンクやキッチンカウンターを支持させて、水回りの床を家の中から消し去ったところに秀でたものを感じた。その美意識の貫徹とモノとしての完成度の高さで有力な金賞候補と目された。しかし改めてこれが本当に20世紀の住宅の社会的なプログラムからの解放として評価できるかといふと自信が持てない。

問題は建築のあり方と、建築することの目的との対応にありそうだ。一つの完結した美しい世界を構成すること至上とする建築のあり方は、目的と距離をつくってこれを相対化し、普遍に到ると20世紀には考えられてきた。しかし、その考えには乘れない自分達がいる。目的と正面から向き合って、主体と客体の相互貫入を起こす。建築の方が目的に近づいて行くことで、日常を豊かにする。そういう時代が求められていると思う。たぶん我々が聞いたかったのはそういうことなのだ。すべての作品を見終えてようやくそのことが認識できるようになったものの、その問題に対してズバリ切り込んでくる作品には出会うことことができなかった。そういう議論を尽くした上で、応募して頂いた建築家、建主、施工者や東京建築士会の皆さんには大変申し分けないことではあるが、金賞該当なしという苦しい判断を下した。できることなら来年も同じ審査員で同じことを問い合わせて行きたい。

(塚本由晴)

ルネヴィレッジ成城

設計者:柳澤潤 (株)コンテンポラリーズ

成城の邸宅に囲まれた旗竿敷地に建てられた9戸の分譲マンションである。敷地周囲に各住戸へのアプローチとなる通路をとつて長屋扱いにし、地下1階地上2階の三層を一戸とした細長、正方形、L字の平面を持つ住戸をインターロックさせて、住戸の間の隙間を共用の中庭としている。自立する壁が向きを変えながら反復されることで、全体が均質な構造的企図の元に統合されている。加えて中庭と住戸のスケールが揃えられているので、平面を見ても内外の境界がすぐには分からない。住戸内部からの縞線は中庭を介して隣家へ、さらにその内部を貫通して向こう側まで達するなど、多様な視深度が複合された場が組み立てられている。大変高度な構成が用いられていることに疑いはない。しかし、雨の中での審査も災いして、異なる個人が所有する空間のインターフェースとしての中庭の真価を確認することはできなかった。町家のような卓越を目指して、さらなる洗練を期待したい。

(塚本由晴)

ジュッカイエ

設計者:長岡 勉+田中正洋/横尾真 POINT/OUVI

狭小な条件ながら、狭さを感じさせない空間を、らせん階段から派生した断片的なフロアをつなぎ合わせてつくりだしている。方法的明快さに加え、家具にいたるまで様々な工夫にとんだ設計であり、生活する喜びにあふれたシーンの数々を想像できる、優れたものであった。審査での議論は、こうした饒舌さが東京の狭小住宅という文脈の内部でのみ發揮されているのではないか、という一点に集中した。与えられた問いには見事に応えているが、問い合わせる視点がここにあるのか、という(ハイレベルな)議論である。それは、住宅という単体の存在がどのように大きさや共有可能性(「都市」といつてもいい)を開かれるのか、どのようにそういう「外側」を発見し新しい快適性とか価値につなげられるのか、という外部的な視点の有無を問う議論である。それはそのまま、応募趣旨でも問われていた、21世紀の住宅の可能性への応答という核心を突く話につながる。

ぬきさしならない議論を誘発する、間違いなく魅力的な住宅である。

(平田晃久)

ミンナノイエ

設計者:間田 央+間田真矢 mamm-design

住宅の典型的な類型論は、内部空間と外部空間の関係性によってなされるが、「ミンナノイエ」では、光の降り注ぐ背の高い空間を家の中央に配することで、この双対性を消し去っている。寝室と書斎はこの中庭を挟んで敷地の両端に配され、ひとつの建物というより、小さな「ピアツツア」を囲むヴィレッジのようだ。このコンセプトは住宅の隅々にまで及び、興味深いアイディアで溢れているが、この小さな敷地には多すぎたかもしれない。いくつかの妥協がなされるべきだった一例は「中庭」を「リビングルーム」として扱うには中庭の樹木があまりに大きく、家具の配置や動線を困難にしており、又、空間を有效地に使うために寝室の階段が押し込まれ、かなり不安定な角度になっている。

とはいえ、この住宅の住まい手は同時に設計者であるため、これらを問題視することなく、それ故、この家が革新的な住宅デザインの「規範」であることを阻むこともないのかもしれない。

(トム・ヘネガン)



ルネヴィレッジ成城



ジュッカイエ



ミンナノイエ

シナの木と白い家

設計者:高橋真紀+潮上大輔 高橋真紀建築設計事務所

生きている神殿

今回の募集では家が新たなコンテクストとなり周囲にフィードバックを与えることが求められた。60年代に田地を転用されたきわめて殺伐たる宅地群に、この作品は種々の問題を抱え込みながらそびえ立っている。見学後もこの作品をめぐっては審査員の間で相応の議論が展開された。

スクエアな作品だが、周囲を遮断するようにたてられた4枚の壁には突き抜けたスリットが大地から空に向かって吹き抜けている。そのスリットの幅で東西の壁と床の間は表現上は巧みに切り離されている。シンメトリカルな構成とそこに即物的に配置された配管が露出しまるで生きている神殿である。

半地下(一階)が寝室、アプローチする二階がリビング、最上階がバス、水廻りという特異な空間構成である。

設計者の両親のための家であるが、老後は老人ホームに引っ越し予定のこと。両親の感想は「住める」とのことである。さらに注意すべきなのは、西側の大壁に付けられたユーティリティ一群が、床と切り離され、吹き抜け部分で浮遊していることである。水も食器も落下する可能性が大きい。その点を指摘すると、危ないところには人はモノを置かないものだと言う。

だいたい合点がいった。これは美的な作品であり、人のために家があるのではなく、美が生活を律するという逆転を起こしている。最上階のバスは通常とは異なる意味を持つ。シェーカー的居住という表現が相応しい。しかしこの解決が、応募趣旨に応える方法であったかどうかは疑問である。

(中谷礼仁)

SPROUT

設計者:峯田 建+恩田恵以 スタジオアーキファーム

数多くの応募の中で異色の作品である。まず農家住宅であること。次に手書きの図面であること。この2つの点ですぐ目にとまった。民家と土蔵からなる親の家の敷地内に、農家を継ぐ若夫婦の家として建てられたこの住宅は、四角な外形と横長窓にピロティそして屋上庭園といったモダニズムの建築要素で構成されている。それとその温かみのある図面表現とのギャップにも驚いた。農家の若夫婦に新しい暮らしを提案したいという設計者の意気込みは伝わるが、既存の主屋や土蔵や庭に対する配置や、その伝統的な建築要素と対立するかのような設計には疑問が拭えない。この仕事には農家の後継や農村景観の保全という都市近郊農村の抱える問題と、3世代居住や仕事場をもつ住宅という普遍的で重要な課題が含まれている。それに意欲的に取り組んだ建築主と設計者の問題提起として高く評価したい。しかしその設計手法としてのモダニズム様式の引用は安易というもの。むしろ手書きの図面表現に込められた柔らかな感覚が設計に結実していない点が惜しまれる。

(安藤邦廣)

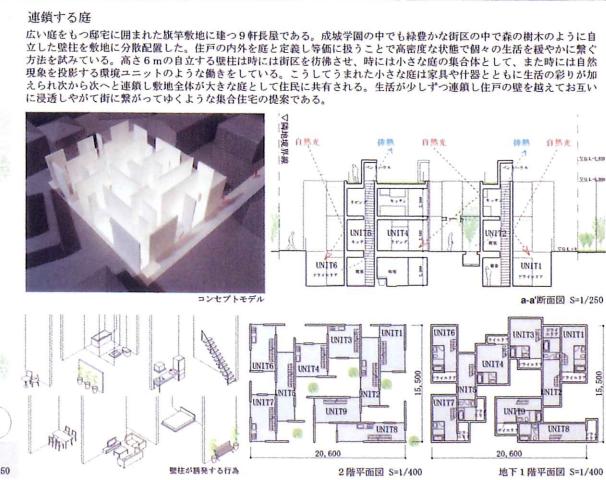
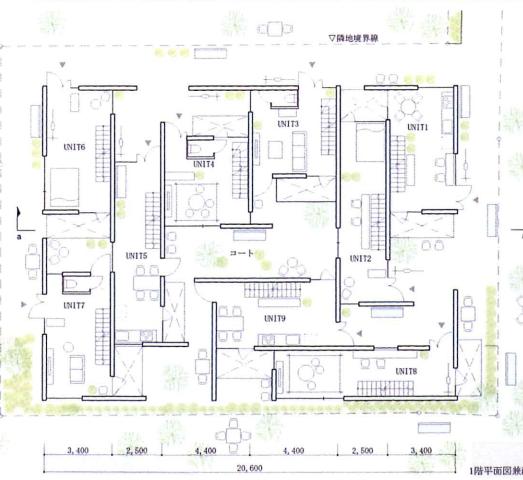


シナの木と白い家



SPROUT

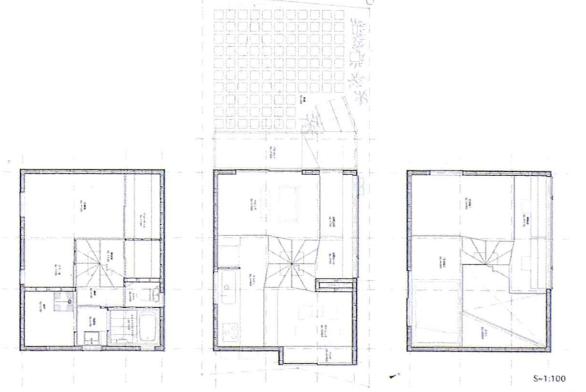
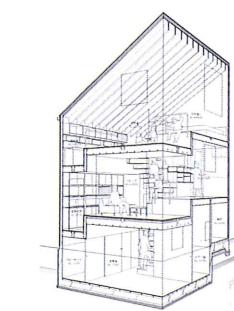
■現地審査風景



ジュッカイエ

狭さを広さに変える螺旋空間

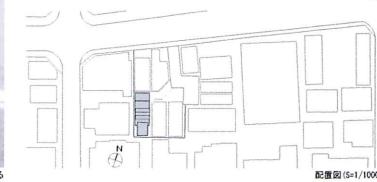
建て坪が約88坪、延べ床が約20坪、に家族4人が住もう。これを2階建てで+αにすれば、20坪の広さのままに狭さはない。また、どこにいても家族の気配を感じられる開放的な住まいが望まれた。そこで、約1坪の小さな広がり螺旋状にぐるぐると上っていく、壁の無いひび割れの空間構成を考えた。(床は全部で12プロア、名付けで「ショッカイエ」) 各床は、部屋と呼ぶには小さすぎるが、場所毎に家具を設えることで、ヒーリング効果をもたらす。螺旋状にぐるぐると上っていく、小分けにされた各部屋。ここで心地が良くなるからが、螺旋状にぐるぐると上っていく実際の面積以上の広さを感覚する空間。さらに、そうした内部が外部へも広がる。螺旋構造の壁や梁は、外側に面する道路と、内側に面する道路と、外側の壁や梁の間が、リビングヒタイングの大きな窓を介して、室内を対角線上に突き抜けしていく。螺旋の構造を敷地状況にフィットさせ、内部での繋がりと外部への広がりを重ね合わせることで、東京の住宅地の抱える「狭小」という問題をボシティップに乗り越える狭小住宅のひとつのモデルになればと考えている。





ミンナノイエ
設計者である私たち夫婦の家です。大きな木が植わる「広場」は外の世界を積極的に引き込むことで、周囲を取り囲まれた敷地の閉塞感を和らげてくれます。また自然に呼応して敏感に変化する木は、世話を私たちの自然への感受性を高めます。

この「広場」によってこの家は、私たちを包み家族という単位を感じさせたり、私たち二人の間に都市を介させお互いを個人として感じさせたり、二面性を持つ家となりました。私たちだけの生活の場でありながら他の誰かのものでもあり得るというこの二面性がミンナノイエの由来です。この空間性に促されるようにこの家のアートの展示や演奏会の会場として活用する試みを始めました。



広場を介してテラスを見る



キッチンから広場と塔を見る

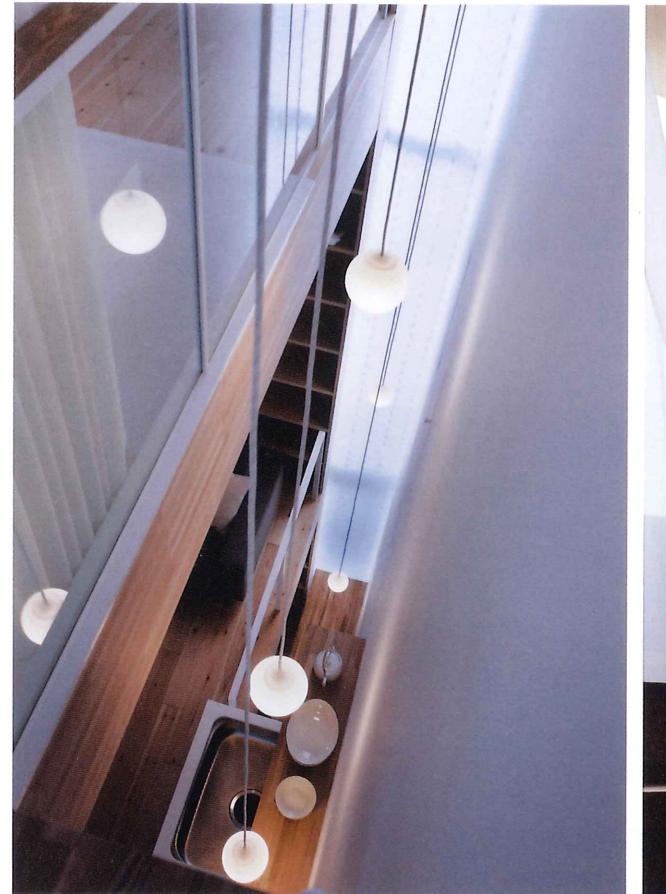


寝室から広場を介してアトリエを見る



最終回「ミンナノイエの夜」

地図から広場を見る



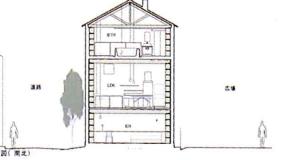
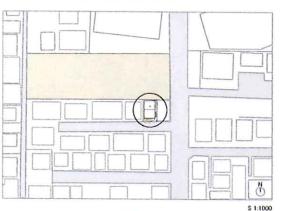
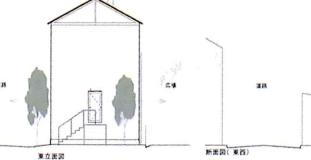
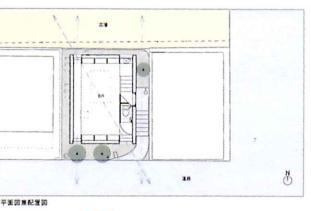
シナの木と白い家

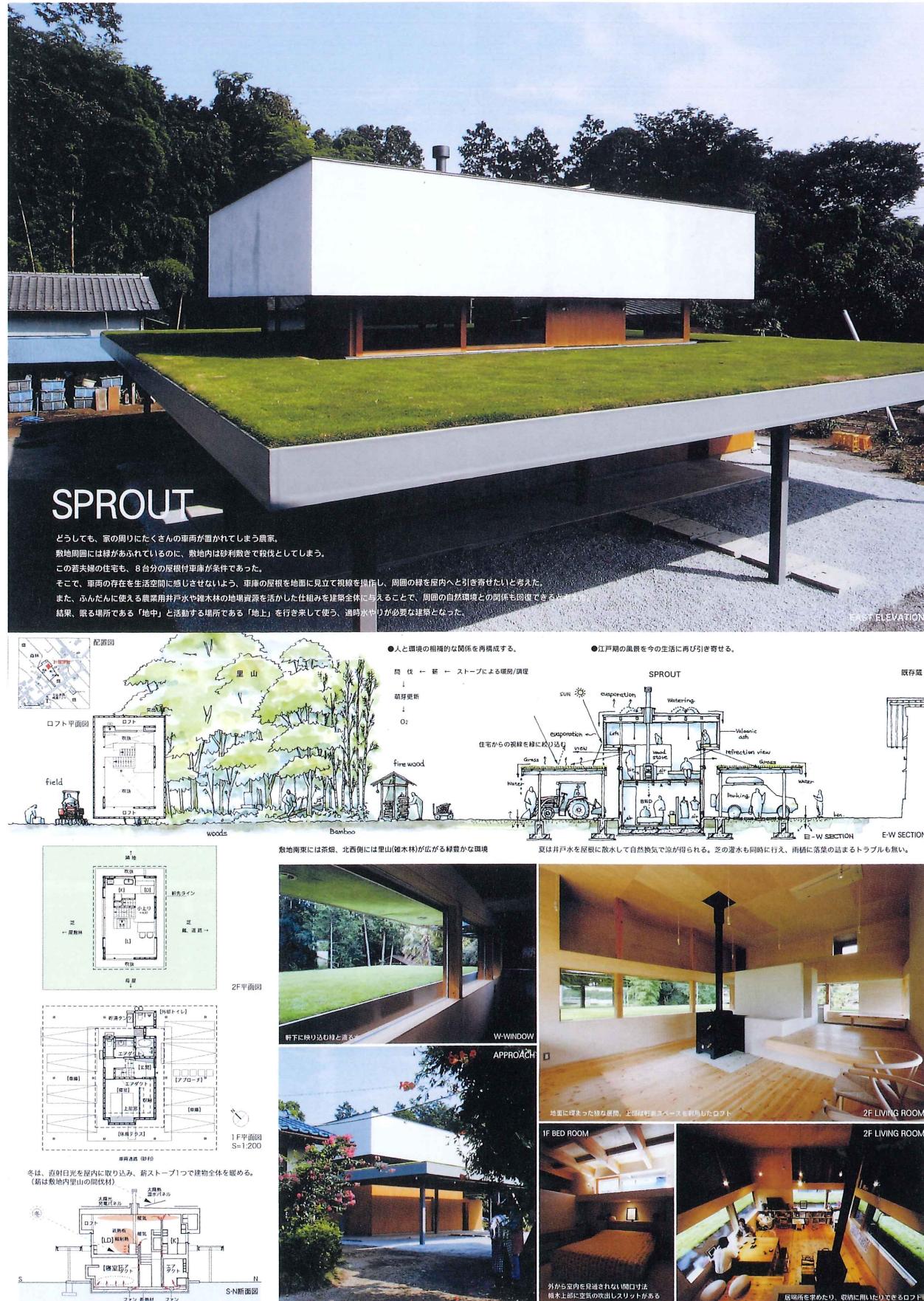
1960年代に開発された水田跡の宅地での建替。それまで使われていた南側道路と北側の公園の間に視線が抜けようとする建物をやや西側に寄せた配置し東側の高い草壁と間の開口部をローチとしました。

主屋棟は南側を望む南側の吹き抜けな木の壁と、間に付けられた壁の上部が複数段からなる、壁の角に生活の擦り声となるよう金色の網とし、内壁全面に壁紙で被ることでストップ秒の壁表現と広場から建物へ接する吹抜けをつくり、窓の前には緑のカーテンのため内蔵をつくつけています。

3枚の床には落葉した1階ベッド、周囲と等間隔となる主張ペーパー、明るい最上階にパスタップを置き、床の家具と対になるように吹抜け+キャビネットや洗面台を設え、家具のような階段が内部を、吹抜けと窓が外部を結びつけています。

小さな住宅のなかに外観とひとつながりの大きな空間の間にあるような生活の豊かさを実現できないかと考えた。





<住宅建築賞受賞者プロフィール>

柳澤潤 Jun Yanagisawa

1964年 東京都生まれ
1990～
1991年 (オランダ)ベルラーヘインスティユート(Berlage Institute of Amsterdam)留学
1992年 東京工業大学大学院理工学研究科(修士)修了
1992～
2000年 伊東豊雄建築設計事務所
2000年 コンテンポラリーズ設立
2006年 住宅建築賞 受賞“みちの家”
現在 武藏野美術大学、東海大学、東京理科大学、神奈川大学 非常勤講師

ルネヴィレッジ成城



ジュッカイエ

長岡勉 Ben Nagaoka

1970年 東京都生まれ
1997年 慶應義塾大学修士課程修了
1997～
2001年 山下設計
1999年 POINT設立

(写真:中央)

田中正洋 Masahiro Tanaka

1975年 東京都生まれ
2001年 東京工業大学大学院修士課程修了
2002年 アトリエ・ワン
2005年 POINTパートナー

(写真:下段)

横尾真 Shin Yokoo

1975年 山梨県生まれ
2001年 東海大学大学院修士課程修了
2001～2004年 池田昌弘建築研究所
2004年 OUVI設立

(写真:上段)



ミンナノイエ

間田央 Akira Mada

1973年 島根県生まれ
1996年 東京大学工学部建築学科卒業
1998年 東京大学大学院工学系研究科修士課程修了
1998年～ 大成建設株式会社
2006～
2007年 Kohn Pedersen Fox Associates

間田真矢 Maya Mada

1977年 山口県生まれ
2000年 日本大学工学部建築学科卒業
2000～2001年 象設計集団
2001～2005年 香山壽夫建築研究所
2010年 mamm-design 設立



シナの木と白い家

高橋真紀 Maki Takahashi

1975年 東京都生まれ
2000年 昭和女子大学大学院修士課程修了
2000～2003年 RABBITSON一級建築士事務所
2005～2007年 岡田哲史建築設計事務所
2007年 高橋真紀建築設計事務所設立

潮上大輔 Daisuke Shiokami

1976年 大阪府生まれ
1999年 東京農業大学農学部卒業
2002年 法政大学大学院工学研究科修士課程修了
2002年～ 安井建築設計事務所



SPROUT

峯田建 Ken Mineta

1965年 山形県生まれ
1991年 東京芸術大学美術学部建築科卒業
1993年 東京芸術大学院修士課程修了、同大将来計画準備室助手を経てスタジオ・アキファーム設立
1996年 現在 東京芸術大学、千葉大学、東京理科大学、京都造形大学、非常勤講師

恩田恵以 Ei Onda

1969年 東京都生まれ
1992年 東京芸術大学美術学部建築科卒業
1994年 東京芸術大学大学院坪井研究室修了
1994年 伊藤平左エ門建築事務所
1996年 スタジオ・アキファーム

